

小村外交史 上

第一章 前 史

第一節 生い立ち

阿片戦争による武力強圧の結果一八四二年・天保十三年清国は南京条約を締結し、開国を余儀なくされたが、それより十二年後の安政元年・一八五四年ペリーの率いるアメリカ艦隊の威容の下に、我が徳川幕府も亦神奈川条約により開港を約したのであつた。一八五七年・安政四年英仏聯合軍は広東を攻撃占領し、更に翌一八五八年五月白河口を砲撃の後天津条約を強要するに成功したが、此等の形勢を巧に利用したハリスの督促に幕府は勅許なしに日米通商条約を調印し、片務的な領事裁判権・協定関税率・最惠国條款を主内容とする不平等条約を締結するの止むなきに至つた。該条約の改訂は明治期の外交を貫く主軸となつたのであるが、最終的解決に成功した外相小村寿太郎が日向の隅飢肥町に誕生したのは、実に神奈川条約締結の翌年安政二年で、その歿年は即ち平等条約達成の明治四十四年・一九一一年であつた。つまり小村の生涯は極東の封建後進国に過ぎない日本が、外国勢力の圧迫に抵抗し又彼等の内訌を有利な背景として依存しつつ、急激に資本主義社会を育成し、その発展とともに東亞に於ける唯一の帝国主義国家

として欧米列強に伍するにいたる間の歴史に外ならないのである。そして小村は以下章を追つて記述する如く、かゝる国家の進展期に際して、純粹且忠実な官僚としての役割を見事に果たしたのであつた。

飢肥は古書に於部又は小肥としたものもあり、又飢肥港と称した口碑の存するに徴し、往古にあつては、その地は或は浜涯に臨んでいたものかもしれない。今は海岸を西北に去ること約二里で、酒谷川はその間を貫流し、舟筏の便に富み、流域一帯の木材はこれによつて油津港に搬出される。

小村家は平氏から出た。平の維貞の時、その弟忠清は、当時己の住んでいた薩州国分の一邑名の小村を取つて姓となし、始めて小村三郎忠清といえりとか。維貞の次子別れて分家を成すに及び、また小村備前守貞賢と称した。貞賢の子孫は日向に行き、一は城ヶ崎方面に向い、一は飢肥に入つたとある。その飢肥に入つた年代は詳でないが、察するに今から五百余年前、小村太郎左衛門元弘の前後らしく、すなわち藩主伊東氏第七世から第九世の間であつたらしい。爾後小村家は累代伊東氏に仕え、徒士席に列し、町別当を職とした。当時の藩制では、武士の階級を家老、給人、中小姓、徒士席、土器、筆参、足輕の七段に別つてあつた。故にその家柄は武門の第四級に属したのである。元弘より十八世の子孫で小村の先考である寛平は、幼名を善太郎といい、晩年平を削つて単に寛と通称した。

寛の経歴並びに後年小村の負債の主因となつた飢肥商社の事蹟に関しては、宿利重一氏の「小村寿太郎」(北京篇)に詳細な記載があり、最も正鵠を得ていると思われるので、それに拠ると寛は天保元年飢肥藩士善四郎の長男として生まれ、慶応三年に山方役を勤務していた。当時財政的に逼迫した藩政を打開するため、明治二年飢肥藩の職制が改められ、山方(営林業)と紙方(製紙業)を合併し物産方と命名独立せしめ、毎年八千円を藩の会計に納めしむることゝな

つた。この物産方創立後、版籍奉還の事あり藩主の伊東祐帰は飢肥知藩事となり、十月小村寛は物産の事を担当し、飢肥県設置と共に任官して権大属となり物産局を管掌するに至つた。四年飢肥県は廃止され郡城県の管下に入つたが、同時に寛は権大属として郡城に移り従来の物産方と關係を断つたのであるが、二年後の明治六年に飢肥区内商社の社長として迎えられた。此の飢肥区内商社は旧藩時代の物産方、それ以後の物産局を継承するものであるのは勿論である。飢肥区内商社は明治十一年末に飢肥商社と改設願を提出したが、該商社は規模は小なりとは云え、毎年八千円を藩庁又は県庁に納め五万兩近い貸下金の殆んど全部を償還しているので、経営は一応好況にあつたと称し得よう。此頃より訴訟問題が提起され衰運に赴き、寛は巨額の負債を荷うに至るのであるが、それは又後述に譲ることとする。

寛には子女合せて六人あつた。長は和歌子といい、日向福島町の豪族神戸政治氏に嫁した。次は長男の寿太郎である。次男は善藏といい、東京大学予備門に在学中、明治十年八月、十八才をもつて夭折した。三男は寿平といつた。小村は故あつて分家し、寿平が本家を襲いだが、これまた早世し、その子の俊一が当主として業を郷土に営んだ。小村の妹たる次女きみ子は川添長被氏の配となつた。小村の生れたのは飢肥の城南、本町通と大手通の交叉する角地の別当屋敷であつた。別当屋敷は緩急事ある際に軍の本陣となるもので、昔は宏壮の建物であつたそうであるが、後年寛の事業失敗と共に家は主を代え、旧邸の一部には小村の一族山本猪平氏が新たに家を建て、そこに住み、旧邸宅の母屋は湯地達男氏の有となり、その後大手砦趾の丘麓に移された。

幼少の頃、小村のために温き薫育を与えたのは、父母はもちろんであるが、特に祖母の熊子であつた。熊子は驚く

べき精勵と潔癖とで有名であつた。毎朝床を出ると、先づ紙燈に火を点じ、小指で燈芯を搔きたて、油を差し、次に小机を引き寄せ、小村を呼び起し、「サア寿太郎、起きて本を読みなさい」と命じ、己は戸外に出て、星を戴いて門外や庭園の草をむしり、箒を取つて、あまねく掃除するのを一日も怠らなかつた。故に小村の家であつた別当屋敷には常に一本の草だにないと近所の評判であつた。しかも熊子は、ただに我が家の構内に一草なきをもつて満足しないで、隣家の門内に入つて、雑草をむしり取ることもあつた。

掃除が終ると、熊子は小村に朝食を与え、手を曳いて小村を学友の門前まで、または遠く校舎まで送るのが常であつた。校門は六ツ時、今の午前六時に開く習慣で、その登校が早ければ小村は闕に腰をかけ開門を俟ち、遅れなかつたのを悦ぶのを熊子を見て「今日も門開け前なので、寿太郎の機嫌よさ々々」といつて自分も悦びを分つた。かく小村は日夕殊に熊子の愛撫を受け、その温き訓育の下に厚き感化を得た。小村の熊子談に、

『余の一家は日々の生活に追われていたため、両親は余等兄弟の教育などに一々構つていらぬ事情がないでもなかつた。そこで、それ等の世話には、一切祖母の熊子が當つて呉れた。熊子は一寸珍しい婦人であつた。もちろん昔の人であるから、学問の素養はなかつたけれども、優すべからざる氣象を具えていた。そして暇ある毎に余を膝近く呼び寄せて或は義経の話をしたり、弁慶の故事を語り、或は秀吉の逸話を談し、源平の旧事を聞かせなどして、努めて武士道的の教訓を与えるのが常であつた。しかもそんな話にはなかく精しく、且話し上手であつたから、余は寝ても起きてもそれを聴くのが何よりの楽しみであつた。この祖母の訓育は、余に對し大なる感化を与えたように覚える。……その頃の習慣として、夏冬ともまだ夜の明けきらぬ中に登校したものだ、祖母は甲斐々々しく孫なる余のために毎朝二時三時という夜半から真先に起き、顔を洗わしたり、食事をさせたりなどし、さらに提灯をつけて余を學校まで送り、校門に入るのを見届けて、それで安心して歸途に就くのが常であつた。』云々、(明治四四年七月『中学世界』)

へある。母梅子もまた男勝りの賢夫人であつた。後年家政が衰え、熊子の悲歎に打ち沈むのを見ると、梅子は国にも盛衰があり、家の榮枯は憂うるに足りませぬ、といつて慰め、依然家業を励んで怠らなかつた。(熊子は明治二十七年四月、八十二才の高齡で、また梅子は夫寛平より遅れて明治三十四年五月、六十九才で、いづれも他界した)。

小村は文久元年、七才の時に藩校振徳堂に入つた。振徳堂というのは今から約百二十年前の天保二年、時の藩主伊東祐相が旧学問所を改造し「又従つてこれを振徳す」といふ孟子の句に因んで新たに命名したものである。

振徳堂の成ると共に安井滄州はその総裁兼教授に、滄州の子息軒は助教に召され、徂徠派を祖述した一種の學風を興し、藩内子弟の志氣思想を陶冶した。

小村の振徳堂に入学した当時には、その師範は平部嶠南と小村兼山であつた。嶠南(諱は俊良、字は温卿)は初め安井息軒に学び、後東遊して古賀洞庵に師事し、帰郷して育英の業に当り、傍ら藩政に執筆した。日向私史、日向纂記、日向地誌などの著書がある。小村兼山(良甫、後に良輔、曾て北京公使館に在勤せし小村俊三郎はその男)も多年藩の育英に心身を傾倒し、徳操一世に高かつた碩儒で、振徳堂の最後の學長であつた。外に落合文輔(雙石の息)、長倉英士、鬼束良策の諸文宗はいづれも振徳堂の耆老柱石であつた。

小村は同学の二三の少年と相携え、竹皮鼻緒の下駄で日々早朝家を出で、祖母に送られて振徳堂へ登校するのが常で、振徳堂では着校の順で業を授くる規定であつたから、學を励む輩は自然登校の早きを競うの風で、小村は概ね一、二番を欠かさず、課程を終えて後は、更に稲沢熊治の私塾について四書の素読及び習字を修めた。

小村が少年時代に、その先輩学友などから如何に見られていたかというに、先づ振徳堂の当年の教授長倉鶴巢(英

士)の回顧談には、

『侯(小村)の容貌は美にして、冠玉に似たりとても評すべきか。私は礼記の句詠を授けましたが、記憶が良く、沈着で百折不撓、己の志したことは万難を排しても必ずこれを遂げなければ止まないというお方でした。然し頑固な質ではなかつた。性機敏で、事を未萌に察して多く過たなかつた。』

とある。彼は幼時眉目秀で、一見藩主の若君に酷似し、宛然貴公子の風があつた由で、鶴巢の小村の容貌を、美にして冠玉に似たりと評したのは、ほぼその俤を想像せしめる。冠玉に似たりとは、多くは外貌は美であるも内容は空であるとの評語であるが、小村は内容の充実した冠玉であつた。彼は晩年には肉落ち頬尖り、皺走り眉歪み、凄惨にして瘦削、ただ耳たばが割合に豊大であつたので、俗にいう貧相といふ部類には属さなかつた。けれども小村の幼少から壮年時代への写真を見ると如何にも眉目秀麗、温容玉の如しとまではいい得なかつたにもせよ、決して瓦の如くではなかつたに相違ない。彼の容貌の一変したのは、明治二十八年春に賜チフスの大患に罹つて以来のことといわれている。また振徳堂の主事稲用津南人の説に、

『侯は至つて寡黙で、小女の如き人であつた。然し威あつて猛からずで、なか／＼忤れ易からぬ人であつた。私共同職間では、後世必ず名を成す人であると望を嘱していた。』

とあるが、幼時余り嬉戯に耽らず、寧ろ寡言沈黙で読書を嗜む風であつたのは、同門故老の均しく称する所で、殊に悪戯児が時には小村を「オイ、鼻ツ垂らし小村」と呼び、鉄拳の一つを見舞うことがあつても、彼は疳癖のかなり強かつたのに似ず、常に隠忍自重して、曾て手向いしなかつたさうであると聞く。また同門の太田繁治氏の談に、

『侯は私共と同時に振徳堂に入門していられたが、非常な勉強家で、また負けじ魂の強い人であつた。私共在校時代は武術の稽古が盛で、皆撃剣を使いました。普通の者は二掛も使うとくたびれてしまうのに、侯は一日八掛も使われるのが例であつた。如何に侯が根気強いお方であつたかが伺われませう。』

とあり、同門の長友かつ子刀自のそれにも、

『侯は幼少の時から寡黙の方で、非常な勉強家であられました。そして常に俯向き勝ちで歩かれる。時には水泳にお出でになつたこともありました。侯が余り一心になつて勉強なさるものですから、私共が三光院さんと綽名を付け、時々「三光院さん、少しはお休みなさい」と申しますと、侯は「そんなにいうな」といつて、余り大声は出さないで口の中で小言を言われました。三光院とは山法師さんで、侯がそのお方に似寄つた所でも有りましたものだと思います。』

とあるが、さらに同門の老岐富江氏の談には、

『私は侯と共に稲沢熊治先生の家で、机を並べて習字をしたが、侯はよく青鼻を垂らして時々駁り上げる。私共の幼時には、先生の内では九ツ時に毎日清書をするのに、他の人々は大概墨を前から濃くすつて置くものでしたが、侯ばかりは決して墨をすり置くことなく、先生の命令を待つて墨をすり始める。書は上手の方で、何時でも上の評点を貰われた。手習が終わると草紙を日光に乾すのでしたが、他の子供は草紙乾しに出るとその儘遊ぶのに、侯は乾せば一旦必ず己れの席に帰り、両手を膝の上に置いて端座し、先生のお許しが出ないうちは決して庭に出て遊ばなかつた。侯は四書五経の素読を習われ、一体に覚えよい方で、家族の方々からは可愛がられました。侯は如何にも美貌のお方でした。』

とある。その他にも同様の古老談は多々あるが、要するに小村の幼時の挙措動作は、その学業遊戯の間、既に尋常児輩と異なるものが多々あつたようである。

特に彼の幼時の学友が今に称嘆して措かないのは、小村の記憶力の絶倫無比な一事である。小村と同門の川崎伝太郎氏の談に

『侯は特に記憶の良い人で、一度先生から教わると、忘れられるようなことは滅多になかった。侯は本を覚えるのに本をその儘覚えようとしても覚えられないものでない。世の中には、その覚えようとするに似寄ったことが沢山ある。だからその似寄った他の事柄なり物の名なりに覚えて記憶すれば容易である、と常に申された。その頃小村は十三歳位であつたと思う。』

とあるが、小村の記憶力の絶倫であつたことは、後年閣僚及び部下吏員の常に驚嘆するところであつた。

小村が外務大臣として議会に臨んで定例の外交演説をなすに際し、予め腹案を推敲した上は、壇上にあつて手に一葉の原稿なく、諄々説いて条理井然となり、しかも貴衆両院に於て演説するところは、殆んど字句段落を違えず、時人評して「暗誦演説」といつたものであるが、それは畢竟小村の驚くべき記憶力によるものである。日英同盟協約の如きも、その成立当初に小村は、英文和文共に全文を一字一句違えずに暗んじていた。英原文ならば交渉経過の間に自然脳裡に印刻せられたとも推測し得るが、後日訳作したる邦文の段落字句をも悉く暗んじて違わなかつたというに至つては、到底尋常人の企及し能わないうところである。日英同盟成立後、我が政府の記念祝賀会が毎年二月十二日に外相官邸で行われる例は暫く続いた。この記念祝賀会は英国代表者を主賓とし、我が方は首相以下閣員及び軍の主腦者若干、外に外務省幹部のみ列席する小宴ではあつたが、席上小村の述べる祝辞は意義ある外交演説として倫敦に打電せられ、日英親交の重要な楔子として英国政府に取り扱われたものである。彼はその際の祝辞の立案を大底外務省雇のデニソンに命じたが、彼はその出来た草稿に一度眼を通すのみで直ちに筐底に蔵め、宴席では再びこれを手

にすることなく、常に無草稿で演述し、しかもその言々句々草稿と照合するに、殆んど寸分の違いがなかつたそうである。ただに公私の重要演説に限らず、その他小村が緊要電訓を在外使臣に發するにあたり、何線により何時に打てば何時に着すべしと大体の見当を立て殆んど誤りがなかつた如き、はた彼の明治四十三年の関稅定率法改正の折、彼が幾十百の税目稅率を大略暗んじて同僚部下を驚かしめたことや、また多年彼に近侍した者も、未だ曾て小村の備忘の手録を筆に見たことがないといつたことなど、如何に小村の記憶力の尋常でなかつたかを示している。

明治元年、十四歳の時、振徳堂の東西兩寮が竣工し、小村は東寮に入塾した。學則には十五歳で初めて入塾を許すとあつたが、小村は秀才の故をもつて破格の取計いを得たのである。間もなく彼は將命の役を命ぜられた。將命とは命をおこなうの義で、即ち日常校門を開閉し、内外を掃除し、師範の用務を弁じ、藩主臨校の際には玄關の式台にて平伏するを任とし、いわば門番兼給仕に當る學僕で、身分の低き者がこれに當るのを普通としたものであるが、他面學費諸雜費一切が免除となるものであつたから將來見込のない者にはこれを命じることがなかつた。

寮の課程は日々六經三史の素読を授け、一、六の日は講義に充て、三、八の日には作詩を課するのを例とした。

小村は当時四書素読を終えて五經の素読に移つたが、なお成重に達しなかつたので、まだ講義と作詩の席には待てることを許されなかつた。随つて嶺南以下の碩儒耆老の教を直接に受けるには至らないで、専ら業を句読師小倉処平、室長守永弥六、その他長倉友治、伊東裕蔵等に受け、劍道を和田勇に學んだ。守永は漢學の外に仏語に長じ、維新の後司法省の翻譯係となり、後大阪始審裁判所の判事補となつた。和田は容貌魁偉、西南の役に薩軍に投じて驍名を馳せ、後赦され官途に就き、東京の久松町警察署長を経て沖繩県警部長となつた。

小倉旭平は、当年の俊傑として夙に群を抜いた壮年の一偉人であつた。彼は弘化三年をもつて飢肥の長倉家に生れ、後年小倉九十九の女爲子の入夫となつたが、爲子の母すなわち九十九の配は小村の祖父善右衛門の実妹であつたから、小村と彼とは血族關係にあつた。

元治元年、旭平は藩用を帯びて京都に使した。時に齡僅に十有九である。彼は還つて振徳堂に教鞭を執り、後江戸に上り、安井息軒の門に学び、傍ら交を天下の志士に結び、戊辰の役には京摂の間に奔走して力を国事に尽し、同輩に推服された。程なく更に藩命に依り、守永と共に長崎に遊學し、その後飢肥に帰るや、泰西學術の必要を同志の間に説き、藩の學政主宰にして洋學を蛇蝎視する經學者阿万豊藏をも説破し、遂に藩から留學生を長崎に派するの議に賛成せしめた。時に彼は齡なお二十有四に過ぎなかつた。そこで藩主は留學生を募り、候補者十数名を得たが、父母親族に阻止された者が多く、小倉の熱心な勧誘で漸く小村と外二名を得た。小倉未亡人爲子刀自の談に、

『主人が遊學生を連れて行くということになりましたが、侯の家族の方に氣進みしない人もあつたらしい。そこで主人は侯に見所があつたと見えて、鑒子貫い受けの相談をせられたけれど、それも出来なかつたので、家族の方に大いにお勧めして、遂に侯も上京せらるゝことゝなつた。』

とあるが、小倉が如何に望を小村に囑したかはこれでわかる。当時小倉を始め何人も、まだ廢藩の舉に想到した者はなく、その期する所は時勢の進運に鑑みて大いに藩政の改革を行い、その振興を計るというに過ぎなかつた。そしてこれがためには泰西文物を輸入するを要し、それには先ず洋學の研究から着手するを要すというのであつた。故にその憧憬するところは、当時洋學の叢淵として知られた長崎で、その師と仰いだのは有名なフェルベック博士であつた。

当時小村の先考寛は藩の植林事務に与り、製材の業を担当していた關係から、夙に郷里に一大木材工場を建設せんとの計画を抱き、殊に曾て長崎に遊び、洋式の一工場を觀覽して、規模の宏大、機械の精巧なるに感じ、大いに工手の學術を奨励する必要を認めていたので、小村の遊學に同意したのも目的は製材用機械の研究にあつた。小村が後年人に「父は何所かで器械仕掛の鋸場を見て来て、あんな考を起して居たものらしかつた。父が私を學問に出した動機は、全く飢肥の木材を私に挽かせる考であつたのだ」(辨本卯平著「自然の人小村壽太郎」)と語つたとあるのは面白い。併し彼は理工の基礎たる數學には趣味がなく、後自ら方向を法律に転じたのである。

かくて小村は小倉と守永弥六に随ひ、長崎に行くことゝなつた。明治二年五月六日、十五歳の小村は別れを両親一族に告げて、飢肥を發し、都城を経て鹿児島に出で、海路長崎に着き、小倉とフェルベックとについて数カ月は英語を専修した。

やがて世運一変、フェルベックの教鞭を執つた致遠館は廢校となり、彼は東上して大学南校の教頭となつた。小村は一時師を失つたので、英語独案内を買つてこれを読み、時には大浦居留地の外国商店に行き、品物を買う風をして會話の試験をなすなどの熱心な獨學をもやつた。程なく彼は東上を志し、翌三年の春、恰も長崎に米国の一郵船の寄港したのを機とし、小倉に伴われ、これに便乗して上京したが、目指した新帝都の最高學府たる大学南校は、薩長土肥の雄藩から送つた學生で満員を告げ、即時入校するを得ない。折から当時牛込早稲田の旧高松藩下屋敷、すなわち後の大隈侯邸の所に、紀州藩士山東一郎(直砥)の開いた明治義塾なるものがあつた。明治義塾は当時英學をもつて帝都に鳴り、故林董伯の如きも明治三、四年の交、一時同塾で英語の教師をやつたこともある。そこで小村は笈をこ

ここに置いた。間もなく大学南校に欠員が出来たので、彼は雀躍してこれに転じたのである。

第二節 大学南校より米國留学時代

大学南校の起源は徳川幕府の蕃書調所である。蕃書調所は後に洋書調所と称し、更に開成所と改まり、維新の際朝廷がこれを収めて再興し、明治二年大学南校と改称せられた。南校の称は、当時漢學専門の昌平校が万世橋畔に大学東校と称していたのに相對したものである。当時教育行政の官庁を大学といい、その主腦の文部大臣に當る者は大學別當、次官に當る者は大監と称し、大學別當には松平春嶽、大監は加藤弘之がこれに當つた。明治四年別當制は廢されて、文部省の創設となり、大木喬任は文部卿に、江藤新平は文部大輔となり、大に教育制度の刷新に志し、大学南校の大學を削つて單に南校と稱し、程なく東京第一番中學となり、翌々六年さらに開成學校と改稱し、明治十年東京醫學校を合して始めて東京大學となり、十九年これに工部大學校を加えて帝國大學としたものである。

小倉処平は東上後大學南校に入つたが、いくばくもなく擢でられ寮長となり、次で大學権大丞となつた。小藩の一年學生が一年ならざるに擢でられてこの要職に就いたというのは、蓋し副島種臣、加藤弘之等有力者の推輓に由つたのではあるが、またもつて彼の力量の非凡であつたことがわかる。

小倉は大いに校風の改善を企て、貢進生の制を建議し、官の容るゝところとなつた。これが明治三年である。この新制度は、全國の大小藩から學力品行の優秀な學生を貢進生として入校せしめ、これに文明の新教育を授けて國家有爲の人材を養成せんとの趣旨に出たもので、これに依り三百二十有余名の貢進生を全國より得た。後年名を成した當

時の重なる貢進生中には、小村の外に、田尻稻次郎、園田孝吉、木下小吉郎（後に広次）、石本新六、古市造次（後に公威）、斎藤修一郎、入江次郎（後に穂積陳重）、杉浦重剛、原口要、河上謹一、伊沢修二、高平小五郎、三浦（後に鳩山）和夫、高橋健三などがある。これ等總計三百二十有余の青年が貢進生として全國より新帝都に集合し、何れも藩の留守居役の附添で初めて大學南校に參着した際の扮装は或は結髮佩刀の武者修業然たるもあり、或は紋付羽織袴にて散髮分梳の代診然たるもあり、黄八丈の貴公子風なるもあり、背裂羽織に馬乗袴なるもあり、羅紗地の戎服なるもあり、千姿万様、當年の世態を描いた一奇觀であつた。まさに彼等は姿こそ千姿万様であるが、いづれも明治新政府が己の愛し子として育成せんとする官僚の卵に外ならなかつたのである。

彼等貢進生は、何れも南校の寄宿舎に入つた。學力は各生の間に懸隔があつたので、その各程度に應じ、學科別で十幾級に配屬せられ、上級者はウエルソンの万国史、クワツケンボスの究理學の類を學び、下級者は初歩讀本、單語篇、習字帳等を習ひ始めた。小村は員外生の長谷川芳之助等と共に英學正則第八等の甲組に入つて、日夜切磋砥励、暮月にして業大いに進んだ。前首相の高橋是清も、當時英學科の教師で「K-n-i-f-e」、これはクナイフと讀むのではない、ナイフと讀むのです」などと教えたもので、彼もその教え子の一人であつた。

序でながら當時大學南校には、右の貢進生以外に、別に本校生と稱する元の開成所以來の學生など三百有余名が居つた。これら各種學生の學業操行は、程度相異り、玉石混淆の觀があつたので、その後校制の改革、學生の大淘汰など行はれ、約六百名の學生中の約半数の比較的優等生のみが在校を許されることになつた。淘汰されたものの中には蕃書調所、開成所以來の學生もあれば、貢進生もまた少からずあつた。